

一 銚子

泉鏡花作

明治四

十四年一月

紅、白粉、紅、白粉。 . . . 但し差當り其
が今どうしたと云ふ譯ではない。京都へ着いて、は
じめての音信に、名所の繪葉書をおも
だ買求める違もないので、繪の具がはりに書いたの
です。白梅、紅梅としてもよし、黄菊、白菊でも可
い。何でも此葉書の表面に、綺麗な幻が浮いて居る
んだと思つて下さい。無事着。

と横向きで床の間の傍に据ゑた、紫檀の唐机の上
で認めながら、電燈の下で向直ると、其處へ、絨毯
の上へ、火鉢の横に膳が出て、圓鬚に結つた年増の
女中が、ト七分ぐらゐに俯向いて控へて居る。

「あゝ、お待遠。思ひ立つた時にしないと、つい
億劫になつて不可い。最う處がきを書くばかり、何
とか言つたつけね、此處は。」

「家號どすか。」

と細い目を眩う仰向く、眉を拂つた青いのも京らしい。

「家號は分つてます。處だよ、何て言ふの。」

半襟のかゝつた、藍と紺の縦縞の、節絲か何か襦袍を羽織つて、最う寢衣で居る。

「はあ、此處はな、貴客はん、木屋町の下でな、西石垣と云ふのだつせ。」ときちんとして言ふ。

「西は西だね、石垣と・・・石垣と書くんだけ、つけ、然うだ。」

と左の手で軽く膝を叩いて、

「友達が寄越した案内に書いてあつた。電車に乗つたら松原小橋と云ふ處で下りて、名宛を聞くと直き其處だ、と教へられたもんだから、町名はうつかりして居た。恚う云ふのが見物に出ると、得て方角を忘れて、私等が宿さあ、はあ何處でがすなんて、昔から極りだやつさ。西石垣、西石垣。」

と一寸書入れる。

「ちやと、出して参じましょ。」と女中は襦を着落着けながら、手を差出して言ふのである。

「後で、結構、これで可し。」

と一つ葉書を手でおさへて、性急に膳に向つて、
更めて女中を見た。

「さあ、頂かう、何うもお待遠様。」と云つて
獨りで莞爾、

「手前の方で、お待遠様と云ふ奴もないものだ。
おつと有ります……しかし、失張待遠だつ
け。……いや、何を言ふやら他愛がない。

え、姉さん、おのぼりさんにもこまるね。」

と猪口を据えて、
「今度は自分へ様づけた。はてな、何うも國が違
ふと、言ふことの勝手が分らない。が、何しろ、佳
い酒だ。駈けつけ三杯、銚子の坐る隙がない。あ、
姉さん、御苦勞様。」

悦に入つた、可い機嫌に、女中も悪い氣はしなさ
うで、銚子の膚へ指で當つて、

「間まが、一遍おしたに依つて、お爛がぬるうお
へんかえ。」

「いや、結構。湯の加減も可かつたぜ。ざつ
ぶり入つて、すつかり草臥れの抜けた處で、……

・恚う引掛けた處は何とも言へない。もう些と酔つて来た。腸へ染みるからね。さて一つお肴をして遣らう、ーおや／＼これは。何てもの、此の魚は、……鮎が、もみぢしたやうな形で居るの
は。」

「ほゝほ、」と噴飯すのを、手の甲で上へ壓へて、

「(ひがひ)だす……其のな、小皿におす酢をつけてお食べやす。とんと最う類がおへんえ。」
と、所自慢も、おとなしやか。